

楊子古印

~13
4269
3



4269
3

物草太郎卷之三



第五回

逐臣得護 絶郷信
窮人乞路 驚行旅



君子多官聞の地みどもも君臣の禮は忌むに攝
の志を厭む寛の厄よとくも萬里乃遠ま左遷した
すやとくも朝の南の方に向く朝拝し臣らも礼
節は多の終るに終る終る年月は過行くも海水と云
ふ流るに二三年の春秋は強くたすむるぬ節也
所寓居た波濤風あつく吹く福居の憂愁を
そとさへ深山の猿聲いと凄然とて細思の情

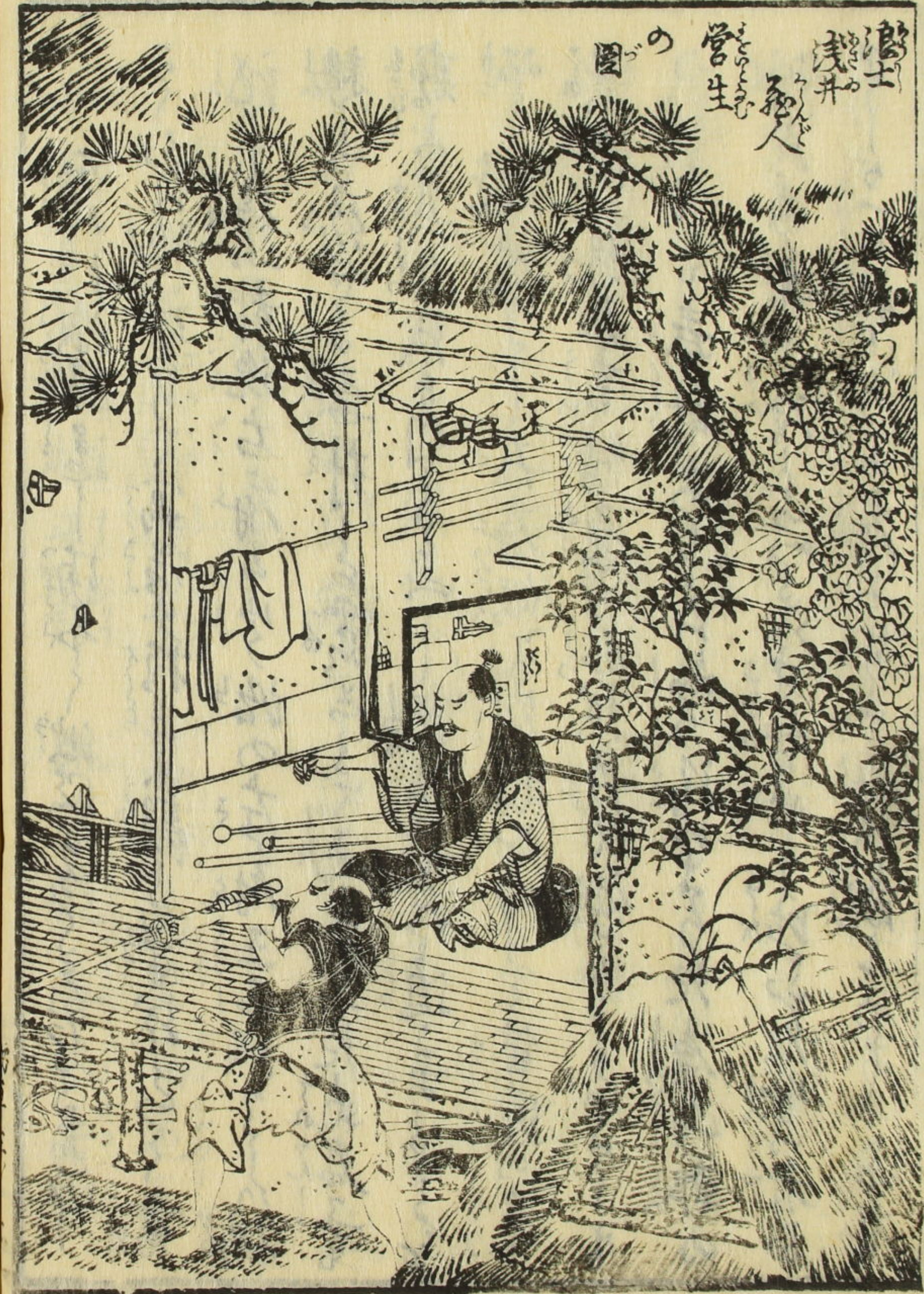
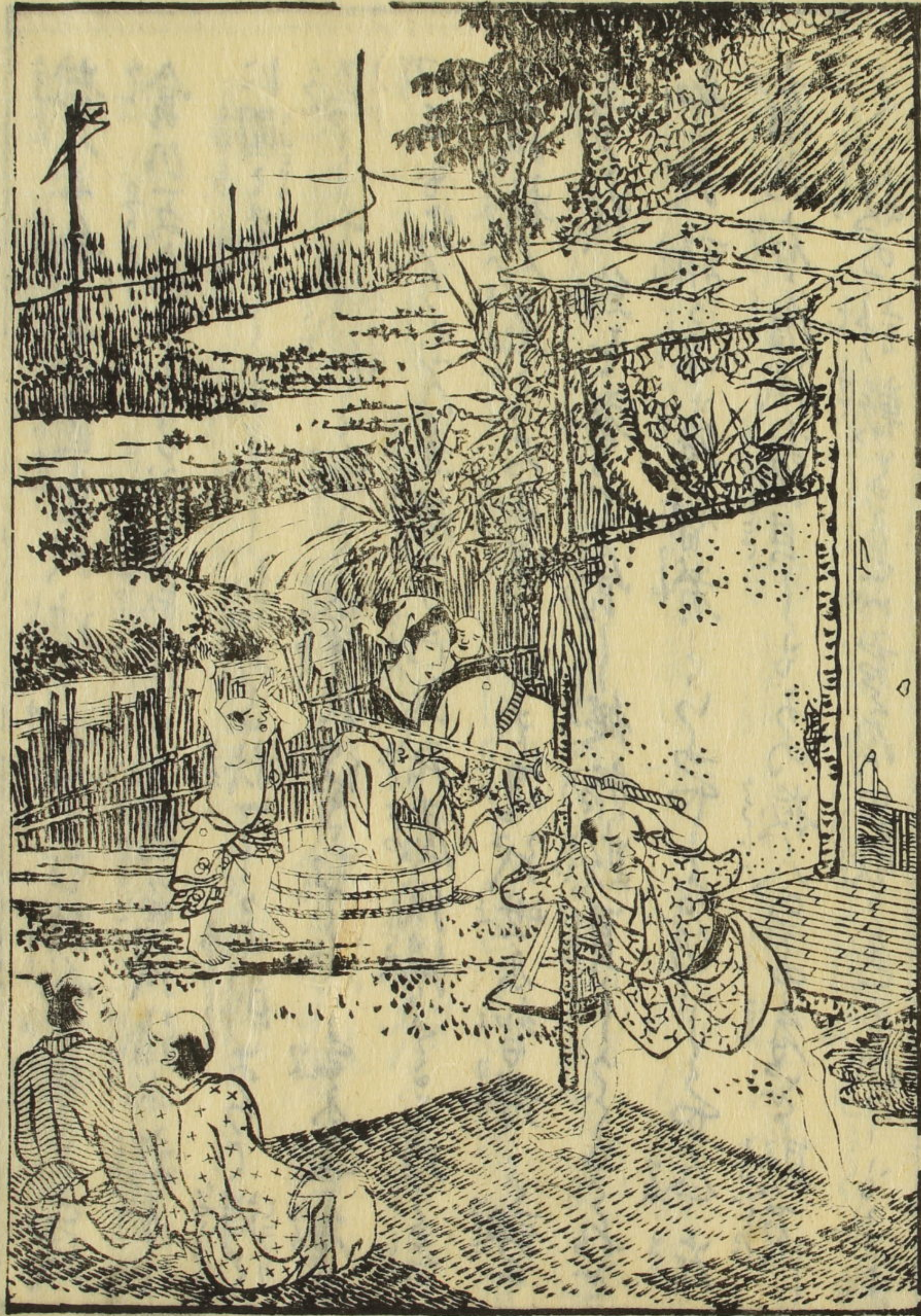
森田正房
61.12

91-2148

名内一箇夫人を鴛鴦の会に裡面く比翼の
枕のらざり今も世に隔り夢にたれ思相心
所袂乾日ふた干隔の身とるる後ひめま官
吏の防守きまひく郷国の音托之圓くわら
いと瞻眺して且暮天中月は光み中々回轉未
きさび會ぬんそ思ひ海路は波未山舟の過
きありしどに身讀みしはま降るるに途
ふた成りのみし

一去故園還幾年 波濤萬里隔遙天
逐臣自恨歸无計 眺望徒看來去舟

おんはげ海路遠く南を波濤のうらむるに
あふん吟詠ありて寓居の格上親を筆紙に書
記し終ふ却洗右府と号治の左府王子に偶
耕して休むる毒針を毒をて過のひたし君を
欺ふ其方成りしとて一圖を世に道よあり
あつて船にぞし左府假て別離をわく笛連の光
景深敷お言情厚の心代洗て儼しとてさ
の右府も毒計ありしとて知ら終るるに唐山鄭の
國に大天子をよるる才智世に比ふる賢者
す一日作よりるをよける思代餽よありし



按人本命して箇魚代池いけ一畜ちかむ按人亭やうてこを代
食くひて命いのちしるるるを表あはれのごとく箇魚代池いけ本もとに
に圍こもりて馬うまとてまきまきおやある状さまやうが少則すくなくありし洋やうに
馬うまとて彼あつに遊あそぶ水みづ中に浮うきまじりてあまの子こを
曰いふもありふん魚うま泳およぎに已まり居いて居いて得えるるは
一い代だい按人あつ退たいくたふ咳せきの子こを代だい世よに智者ちやと評ひやうせ
とど我われ魚うまと考かへて食くひ彼あつに欺あぶる買ひて
知しる代だい誰たれの子こを代だい智者ちやと評ひやうせ
府ふに在ある代だい欺あぶる買ひてもあまの按人あつの
と一い般ぱんの計けい較けうもあまの古ふる府ふの欺あぶる買ひても
ころあり且かつ統と遠とみ城じやう州しゆ山崎さんざきの郷きやうよ浅井あさい屯とんとふ一い個
の壮士さうしあり兵へい學がく擊げき劍けんも達たつしやうも流りゆう射しゃ代だいとて
くれど母はは直ちよくしと義ぎ氣き代だい重ちゆうと世よに媚めいを
ふもれはあまの買かひて箇い些せ門もん人の東とう脩しゆと受うけ
子こ女によ三人さんの口くちを餉くわうしぬ楽らくが技ぎとて
里りに和州わしゆとて聘へいとて敬けいありと親おや母はは考かうる代だい辞じ
して事こと代だい好このむ其その深ふかいんと推おし尋ひ小こ楽らくが足あ後ご井い
を人ひととて橋はし故こ右みぎ府ふはとて親おや隨ずい官くわんとて
武ぶ勇ゆうありと繁はん直ちよくの士しとて公こうも深ふかく愛あいを
ありて橋はしありと一い代だい下げ代だい名なありと士しふりま

ありて橋ありと一い代だい下げ代だい名なありと士しふりま

あゝと云祖上の墳墓へ焼香はりきつたに吾人を
乗輿り左側より後山陪しゆりきつたが一個の古民葉
葉の前は頑忌憚りく擗りて依しとこのふ忍耐ぬ
氣多るの藏人帯廻りて扱ふも目を足明日はこ
ふ刀代ぬらおぐらふ乗輿の中よりやよ藏人入る
きりけりやと云ありて勢もゆるり海と土民の喧
一聲身首両断と云らりやなり那古民と云房崎の
の領内の民やりしが小人と云れは罪状を以て吾人を
深く怒恨く渠が一族を房崎家へあしと云はれ
次の日吾人代其前より出さる暇日你我と云ら

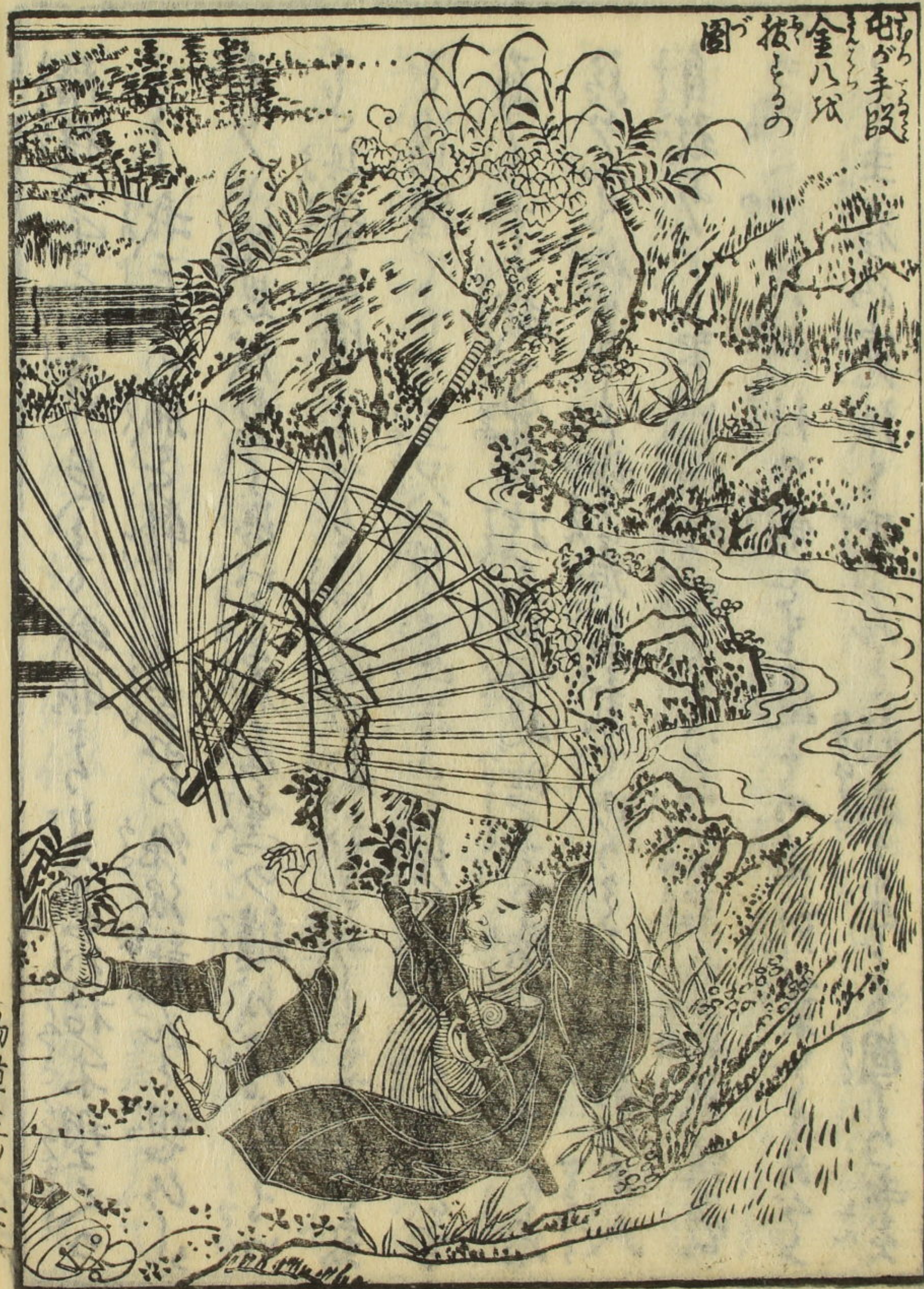
那と聞しやと命ありきつたに吾人と云はれ
房崎より換令し持体し取く吾人あぞ己が過を
悔きも代をすこ空ひきくは係が輕刀を以て吾人圍と云
も勢の嚴信づきしと云りしやん係命も吾人の
ぶら余り終代おしりしと云ても墳墓焼く途申
と云聲を以てけしに渠を殺害せしと云云快あり係平
常懈怠なく終事て忠直あり余が知る可らり然
ども吾人代と云きと云らば君實代と云後世に何と云
衆多の士代使ん又渠が後房崎あり概きと云と云
ば任代就地と云らば吾人房崎ありと云和の甚しき

あつて故うきくく唯だくまのあり那里へありとも遊む
いづゆる事だも做して生活だまはし時節をわき
隈原もあはれと國金百両はあゝ賜うたはれ人
と海はあつては君命に背く罪奇獄の殊と實
害のあつては宝貨を賜りありてはあつては
世にけし心肝を猪どて遺かつて涙あつて其前
あつてはあつては退糧人となり山崎の御又相識の寺あり
まゝの地は寓居して兵法撃劍の術は指南して
ありては日石等のごくたらし中主君燕くのみぬ
と聞て藏人大本力代落し我出て君恩代報し

あつてははれは殉死して真路の奉陪せんよとぞ不破
はあつてははれは其妻とのあつてははれは
日君ありはれはあつてははれは
君滅り忠をおりしあつてははれは
仕して累世君臣の目代表あつてははれは
あつてははれははれははれははれははれは
悲傷のあつてははれははれははれははれは
あつてははれははれははれははれははれは
くしてあつてははれははれははれははれは
己主恩代あつてははれははれははれははれは

忠臣忌日再び時節は窺ひ歸仕は希はば
と教訓あり或は懐く我らもあはれと
毛子の遺言は守りよお業は終る多
少は後成事くふ末がとつても其
一流の奥妙はさるぬ何とぞ
出んとらふありや右府達流は
大めらうは成るくさるが
皆在右王よ二個の奸計や
くは探聴くは中々大は怒りよ
鳴毛より輕く渠二個の奸賊級使
いやくと権勢ありて

陪後の士衆多とくも我眼より見
こく我二個の賊を輕く主家の
しく沈思はめぐるは若左の遺
まど此世の中は帰洛の期も
を懐懐てり主家の身はあ
願すく我一人は控ふは母親
終るも便りすと警着身氣
自殺ありし事代聞時思
の洲へは歸仕の願も
し主君は寛代も雪ぐんと起
志も下も固より素



しと盤纏の棚漕もちろしと志一が果さるしと
偶然沈思は快く何れも忠念の馬をどろどろと
武お八は腹地のより出く行旅に隣燭と清くと其
天晩ての地へ迎へた等待した時境雨小降くさ落
耐身身はとせ雨は志のたるとに前面より一個の行旅
裾裾裏脚よりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
お傘よりぬけ抱抱はとげ来至は屯は耐の中ら
とど行旅に對ひ折腰て敗落散場する思糧人
よく困厄よせするものなり箇此の技助は賜く感激
と云は箇漢子呵くと云は箇この這街道は深夜一個

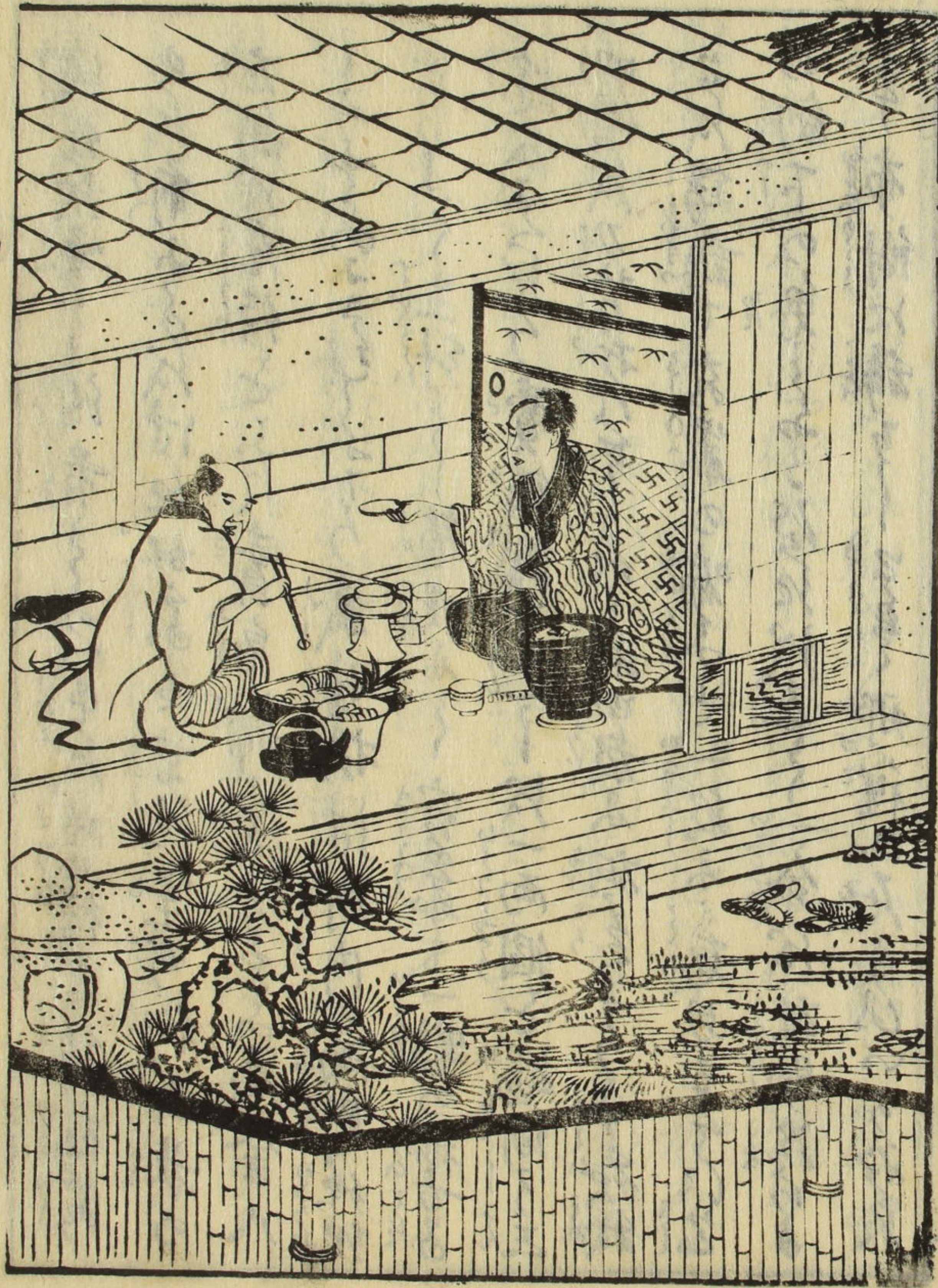
終とこのの堂後方からこの形とんや我徳の甲は
お圓金ありはの挿はたか刀ありは切きとん
お収去るはは後過りともは屯は抄よりと云は
やれとのよりは箇此の技助は志のなりと云は
再四と言ははくともははははははははははははは
巴より技助はさん事おとひよりははははははははははははは
益目の浮子にあははは金と云は這裡おあつと云は懐と云は
搭傳は出よりけ切きと云はお収去ると云ははははははははははははは
今も慈悲得るの腰より刀は後にも見てもははははははははははははは
たる傘の轆轤より挿ははははははははははははははははははははははははは

傘多 左者み飛らん 樂漢子と 搦地と 望後倒
 依氏氏が 輕刀初めらん 鞘内 波出らん 肉とせう
 就地 鐔と 鍔御音して 睜と 着眼 我毎と 西四 舞次
 輿より とうとう 氏を 取らぬ 武士 取らぬ 元禮の 辨ゆ 氏を
 以 報す らぬ 殊と 殊と 殊と 殊と 殊と 殊と 殊と 殊と 殊と 殊と
 好まざり 怒り 怒り 怒り 怒り 怒り 怒り 怒り 怒り 怒り 怒り
 が 蛇の 言は 固て 肥將 起出て 蛇の 前へ 磕頭し 太
 失言 氏 悔と 管に 央言を あい ぬる 人あらず
 中 乃や 奴る 市人 あら 武技と 嗜む 一向 好箇は
 劍士 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り
 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り 交り

たり ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
 用成 赦し ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
 徳あり ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
 肉店あり 平常 通商の 種あり ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
 陪一 義派 奉らん ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる
 居らん ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる ぬる

第六回
 得良 師義氣 相許
 遭田 主悲喜 交集

却説 箇旅客と 蛇 誘ふ 八徳乃 街市に 至り 酒肉店
 小令 清楚の 團圓 嘉次 棟で 虫 誘ふ 色

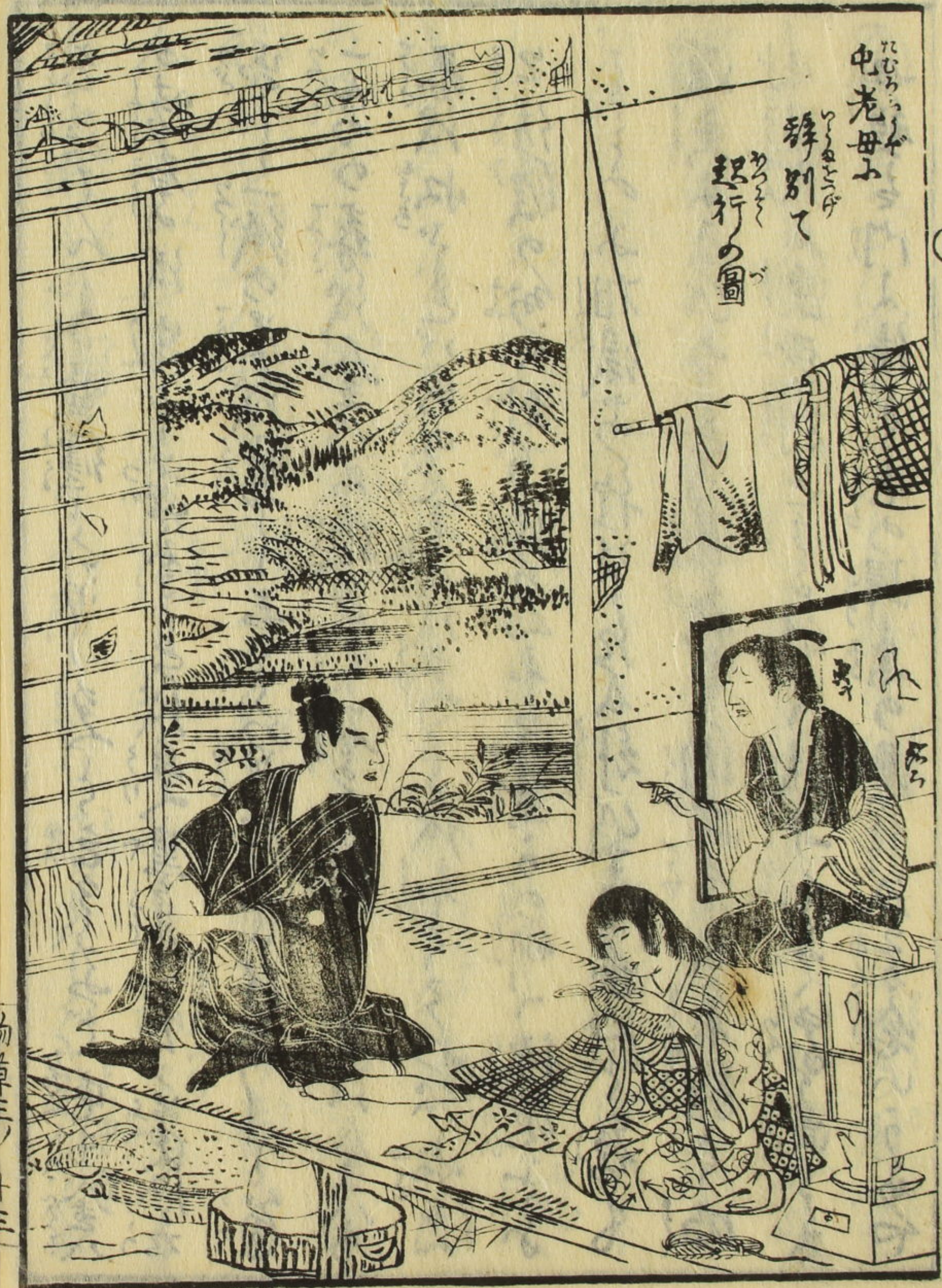
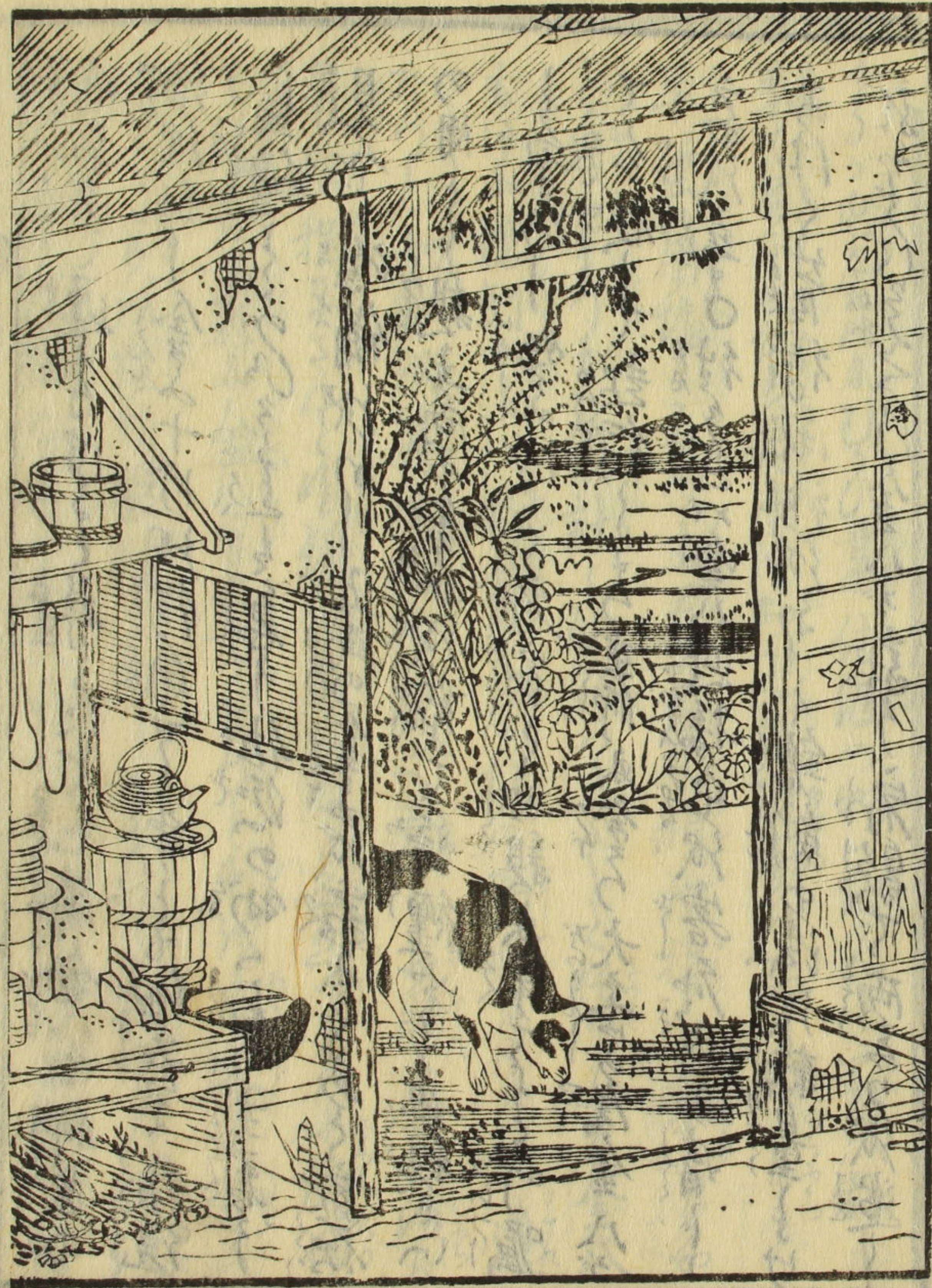


酒保さかは喰くど酒さけ者ものとくの中なかに管待くだいし箇族かんとくあり
中なかに前まへふりばは死しぬ家かと京きやう海うみ室むろ町まち街かみ押おし巷ぢやうの
左ひだり側に居い住すまをふた賣うり帛ひもと鋪うらとくたふふ金かね八はち
しうふふのふさびふちり歳とし時とき提ひきけ河か内うちの西にし園えん終はつ紀ぎ
とくしう生なま針はりとく箇か堤つとめとく客きやく車ぐるまも一ひと夥おほの御おん書しよ
逢あはさるらう賣うり路ぢよ銭せんとく一ひと一ひと個こを踏ふ倒たふる三さん
四し圓げん代だい刀はち背せおれせとく北きた四し敷しき木き相あひまきとく今いま夜よ我われ
とく瓜うり錯さく認とてお業わざの喘あせ子こと一ひと般ぱん小せう意い思しとくとく
の剣けん下したの鬼おにとくさるら死しに成なる一ひと命いのち代だい持もち助すけ終はつる
半はん布ふ緋ひに穉こりしとく那な裡ぢよふ居いのひしうお敷しき

縁ゆかり故ゆかり中なかく這こ般ぱんのふもをありあつる身み當あたりぬめりや
と推おしるふも屯とん微み嘆なげとく下したの起おこ敷しきぬもはらあり
某たれ多おほく浅あ井い屯とんとく橋はしとく果くだ世せの長ながたらしう故ゆかりあり
て是こゝ様さま人ひととぬり山やま崎ざきの御おん二に寓あき居い代だいとく岳たけ世せの剣けん
法はふとくぬり生なま付づとく今いま箇か地ぢありと計けい細さいとくり
下したも知しりたつる人ひと主しゆ君くん佐さ渡わたに在ありせば二に回かいの地ぢも
おもむいたく意い思しとく自みづかしとく盤ばん纏ぢんの棚たな漆しやくとくり
おとく箇か造ぞうおとくぬり足あのふ人ひと水みづ燭しやくとくぬり
とく一ひと五ご一ひと十じゆとく先まへ藏ざうとくとく活かつ統とうとく金かね八はちとくは
聞き拍ぱく骨こつとくたふ嗟さ嘆なげとくとくその忠ちゆう勇ゆうとく無む金かねとく大だい丈ぢやう丈ぢやう

の土と云ふ公が申さうと接勝の裡より二百兩乃圍金と
しりおし此の膝下にさしおいた箇をまゝと師子の
綴成ありさしお東脩に呈とせしりさるる公
は此成聞くとお思ひさるる事此の某縁由なく
しり今更には大金成受る事さるる如しと昔は細
き事ありしと云ふ金八さるるこの大金成の圍より公
の形有なり備公尋事持人ありさるる公の事さるる
我命と喪人既に金八さるる公と両個ありさるる喪人
んと再と再と云ふ成強とさるる事さるる諸事あり
しと漸と損とさるる十兩とさるる煩とさるる路の公

を強と云ふ公の盤纏とありさるる公の事さるる公の金
が情更成強とさるる事さるる公の事さるる公の事
おし一紙の券成寫しとさるる公の思借とさるる公の
一紙の券成金八とさるる公の事さるる公の事さるる
券成收とさるる公の事さるる公の事さるる公の事
公の法渡のおし到り強とさるる公の事さるる公の事
ことこのお相織ありさるる公の事さるる公の事さるる
深更ぬるびぬるとさるる公の事さるる公の事さるる
月早夫ぬ東西とさるる公の事さるる公の事さるる公の事
如親と云ふ公の事さるる公の事さるる公の事さるる公の事



屯ふとて遅らほると尋らんとぞ屯箇金八と師身の
約代り金十斤代傳用で半も細密な結統
盤纏とこのひきと急う佐佐の物あり主君の
見んと準備代り五兩の金子代家とあそ家依
の用と親五兩の金子代帯て盤纏と母親の
と急ひ一様ふにしく看家と母親と来てとく叮囑
て分袂と起行しませ而も登り大文字屋金八が
之代尋の社と金八迎接屯代客所内と清と
あけく管待用代り鎗劍の法代較量しけ
於てと下と金八が宿歇て所より代遊

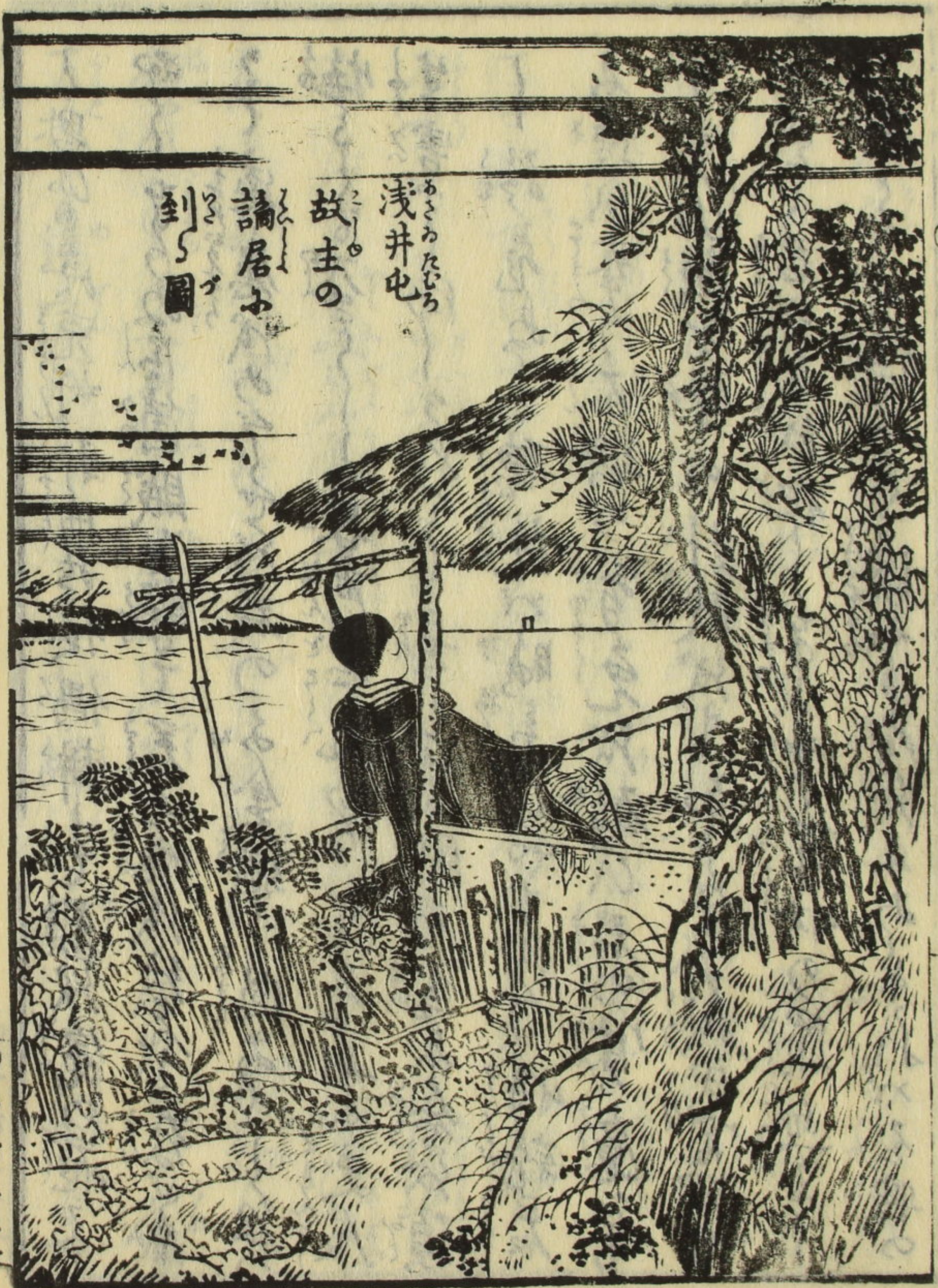
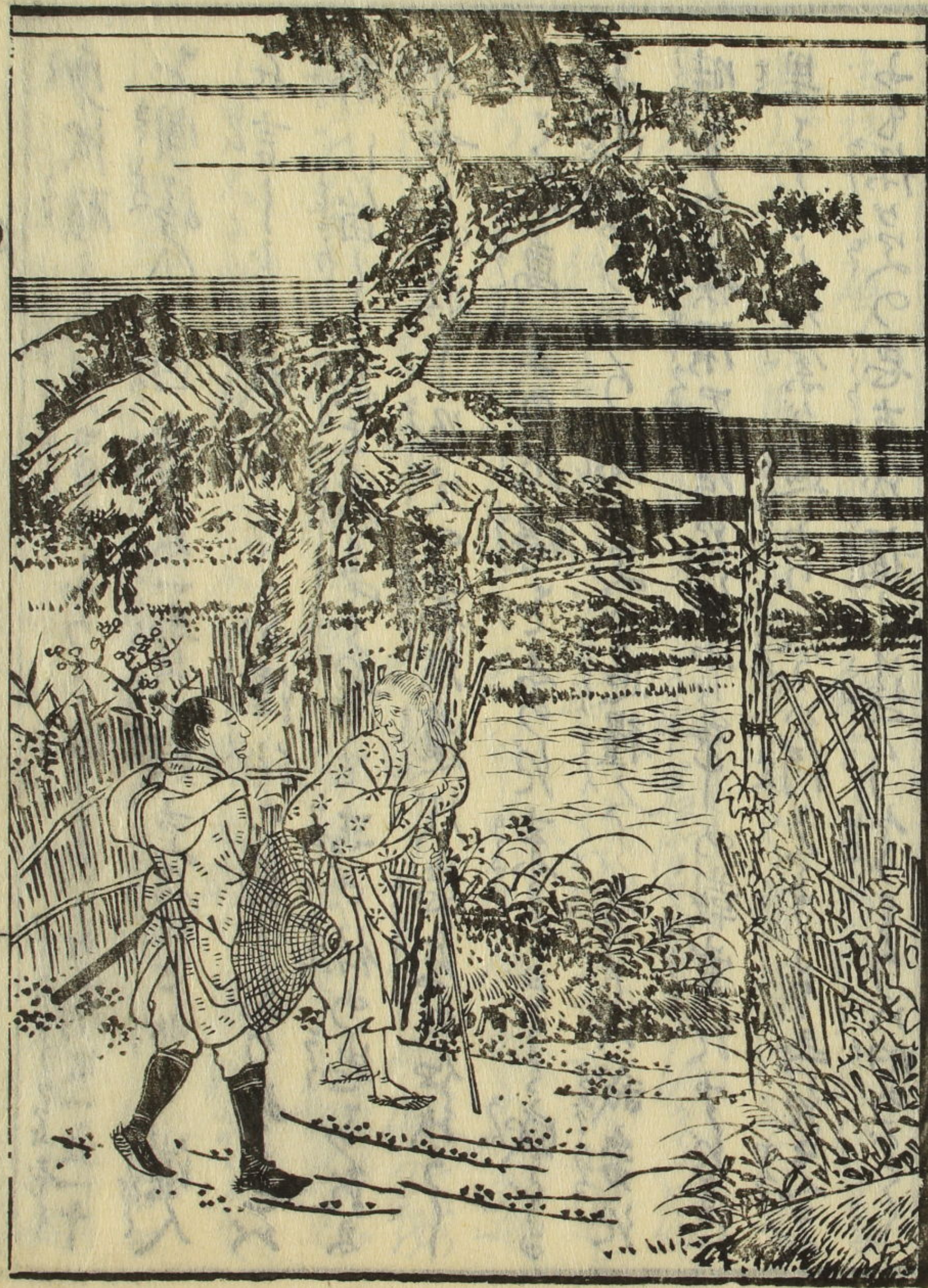
多るが屯金八はびり其佐渡の物と起んと家代辞し
来てと下の管待とくおと下と耽閣代りぬ一日と
早些箇地とあり主君の尊顔代様と奉らとや
と思ふ方りよと計しひ終つとと托と子と金八
もけ小鎗劍の法代較量し周結の高典と代遺
たりと小斬代箇結紀人の終へ差しと聴らぬ後日
多る起程とんと準備代りぬと急う急うと少廻回
て彼者多と金八とと幸なりと屯代商客と扱と
能く言代及び數付と外と終と托とと箇結
紀人否とと結ぬとと金八屯と急うと帰と代待

うらひありと舞別くまみ甲うらる屯き箇人とも
く起行し越前の國敦賀の湊に至りて是より乗
船して纜代祥順風ふ帆代あざるふ時境海波
穏や〜日あり佐渡の洲へ着岸す〜六個の船
よりあざり新孝代傳言船行戸家よ〜酒飯と喫
飲し〜別路ぬ退散れ屯も包裏代昔ひ新戸家を
おく四下代尋ひ廻りて西東〜ふ〜ひぬと〜まよ
ま土地の案内お〜ご移る箇裡這裡と〜聽て田丈
子詢ひ〜主君の在り郷ぬ来り見らふ前を渡
〜海水濤あ〜背を〜嶽〜に於劍と〜夫〜てもの

と〜野草踏代埋〜人蹤あ〜る〜跡に〜値不
〜壇〜門扉ぬれ茅屋ふ〜た屯酸鼻〜て涙と流
〜人世の業枯〜る〜も斯〜で郎當〜す〜ひぬ〜も一身
皆王子左衛門の毒針と〜は〜と〜自認悔氣〜奉〜と小
〜り涙法然〜と流〜る〜に裡面より六十有
余の老媪と〜あ〜く僻郷枯〜聲〜して客を那里
〜人〜お〜ん〜と〜同〜り屯馬ぬれお〜生〜る京師の
商客あるが老爺の面とも持〜す〜都〜り名
稍信とも告〜と〜手〜けり〜と〜ふ老媪〜を〜聞
〜え〜侍お〜と〜あ〜と〜右衛門小存の〜〜〜〜

右府之を清の音家其初風を以て抑ふるもの
いふるも亦都の者といはれしと老嫗みか
隨即屯代長すすま屯廂内入る右府云の其お
了出通下て席薦を頭代擔入て長を深井蔵人の
一子同苗屯すすまいぬ士父先君の右興を蒙り
不幸にす先君に身奉ぬたは臨み臣代枕邊に
ちのばも士父先君の重息代をすりて其代に
存すくお代を遂にすすまを悔はぬ教訓して再勅代
願ひをり父代を忠務代すすまに代りて一編
万托と遺言代ありすすまより歸仕の願をも奉らる

と思ひに克奸邪曲を徒偶耕して君代冤の罷り
おすすまに右箇賊を撃て君の代代を存す
つと遠慮代めがせ君の金軀を過あると其
悔もも及ぶと吞声息氣ありとすすまは主人
生害すすまにすすまは是も箇賊乃為命代預
一は代をぬく聴統バ略氣りやすすまは將就君
み遭ひ奉る右興の宥免代願ひ君の賢慮を
うすすまは賊を撃の計較代もあさんと義民官代も
すすまは君の面代代りすすまは事君状の罪を
すすまは人傳すすまは通すすまは代りあはる興の



身代頼みだ見まゝありてこそとて右府に二十五十
と聞給ひて曰實は一貴一賤立侍と知く漢人
み言しとて我今このお漂泊の身とありぬとて
都に留し家士衆まゝとても末ぞ你的忠あるま
るぞよの如し你父の志代遺は忠なるの如く
ふとて万里の波濤とておのれ末とてこそ感
ふ尚餘りあり你父の退糧人となりし我父は
時たり疾環石だれ代官軍の鞞掌にすはる
果とてし余が過あり今何とてしとて先君
も保ご父の忠直代補し給へり今何とてし

主様とて癒しとて或は喜歡あるは難は給ひ
申とてよおのれ父黄泉の下とて在躍代とて
と依して命の感激と謝しぬ君周てのよひ
新子偶耕しと毒計とてやとて何ある事と
ありとてお屯頭代等て君いざとて左衛門子の毒
計代とてめおとてとて果とてとて箇兩個の秘
計と告とてに右府に勿体面を代變とて
しとて大お怒り給ひ向し向し睜看眼で亂賊あり
我を欺負しとてと握奉切藪て火槍のぞとて息を
絶帝とて恙ありとてとて朝廷も忠臣とて一

もふたやと宣ふに屯謹と朝廷の綉紳地下の武士
あつてもまぐ左府王子の威権とせられ畏依り側目
て見るともたもゆらぐ一個深草中将赤満郷おひ
出松大納言義高郷北畠中納言憲明卿のこ渠之
曲とあつて終ひて敢て屈服し終るるを尋ま
るるに害アんと計りて深草中将父子勇猛の圍
をばらぬを怕てつて終るるに終るるに終るるに
公が怒成志門め終る一書成書くゆり終るるに
草中将に此書成呈せしむるに密に詳細如此く
稟るるに終るるに終るるに終るるに終るるに

夫人の自害ありし紙聞るもひと嘆喟大哭たすし
賞りて扱ありて女の道止るるに終るるに終るるに
の寛藤子もや世りまゝの婦女も得るるに終るるに
し肉成治る一個の依成り終るるに終るるに
まぐあつて終るるに終るるに終るるに終るるに
し追薦の佛事成終るるに終るるに終るるに
屯と懸るるに終るるに終るるに終るるに
終るるに終るるに終るるに終るるに終るるに
あつて終るるに終るるに終るるに終るるに

物草太郎卷之三畢

